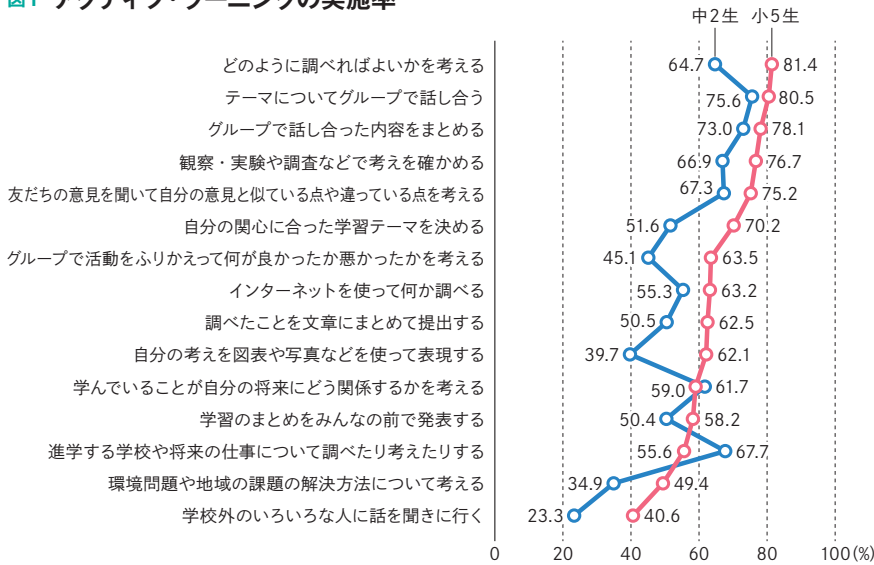


「主体的・対話的で深い学び」の可能性と課題は？

新しい学習指導要領では、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」が重視されています。その中核を成すのが、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」です。今号では、その可能性と課題について考えます。

1 「主体的・対話的で深い学び」は既に広く実施されている

図1 アクティブ・ラーニングの実施率



注) 「よくする」+「ときどきする」の合計 (%)

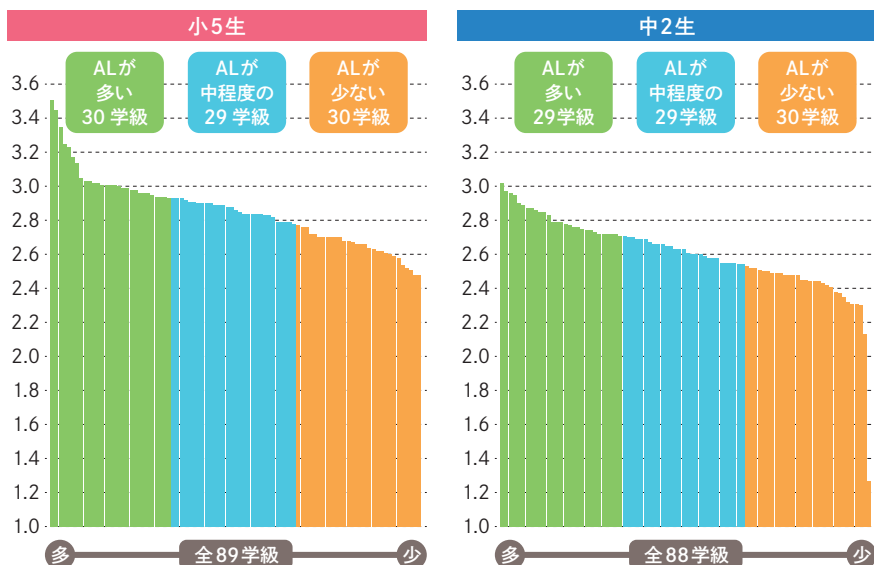
グループ討議は7~8割が「する」と回答

図1は、「主体的・対話的で深い学び」（以下、アクティブ・ラーニング）と呼べる学校での学習活動について、どれくらい行っているかを子どもに尋ねた結果だ。「テーマについてグループで話し合う」「グループで話し合った内容をまとめる」といったグループ討議を伴う活動は、小5生も中2生も7~8割が「する」と回答した。

テーマ決定から、調査・探究、友人との協働、まとめ、表現・発表など、ほとんどの項目で「する」が半数を超えていた。多くの児童・生徒が、既に日常的にアクティブ・ラーニングに類する活動を行っていることが分かる。アクティブ・ラーニングといっても、今までと全く異なる指導が必要なわけではないと言える。

2 取り組みの状況は、学級によるばらつきが大きい

図2 アクティブ・ラーニング（AL）の実施の状況（学級による違い）



注) 図1に示したアクティブ・ラーニングの実施に関する15項目（1=まったくしない~4=よくする）について、学級ごとに平均値を算出し、多い順番に並べた。

実施率が高い学級と低い学級が存在

しかし、その実施の状況は、学級によって異なる。図1に示した15項目について学級ごとに平均値を算出し、多い順番に並べたのが、図2だ。

例えば、小5生で見ると、数値が最も高い学級は3.51、最も低い学級は2.48だった。調査では「よくする」「ときどきする」「あまりしない」「まったくしない」の4段階で尋ね、それぞれを4点、3点、2点、1点とした。つまり、3.51という結果は「よくする」や「ときどきする」という回答が中心になっていると推測できる。一方、2.48は「ときどきする」と「あまりしない」の中間に位置している。また、「あまりしない」や「まったくしない」という回答が目立つ学級も存在している。

小学5年生、中学2年生、高校2年生を対象に、1990年から定期的に実施している、子どもの学習に関する意識・実態の調査。2015年調査では、小学5年生33校2,601人、中学2年生20校2,699人、高校2年生18校4,426人の協力を得た。

◎本記事の内容に関する詳細は、下記をご覧ください。

●小学校・中学校・高校における「アクティブ・ラーニング」の効果と課題

https://berd.benesse.jp/up_images/research/06_chp0_4.pdf

ベネッセ教育総合研究所
主席研究員

木村治生

きむら・はるお

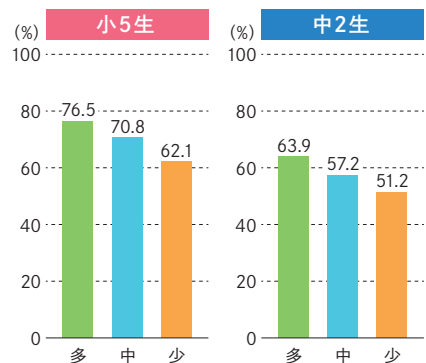


専門は教育社会学、社会調査。乳幼児期から高等教育まで、子ども・保護者の意識・実態や教員の指導に関する調査研究を担当。文部科学省を始め、行政委員や大学講師などを歴任。

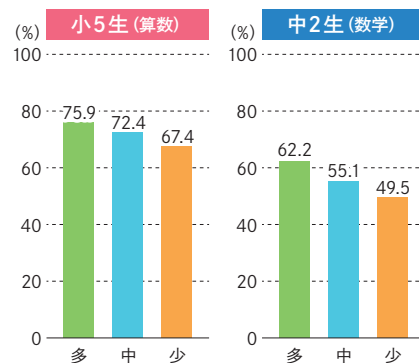
3 アクティブ・ラーニングは関心・意欲を高めるのに有効

図3 興味・関心の広がり(学級ごとのアクティブ・ラーニングの実施程度別)

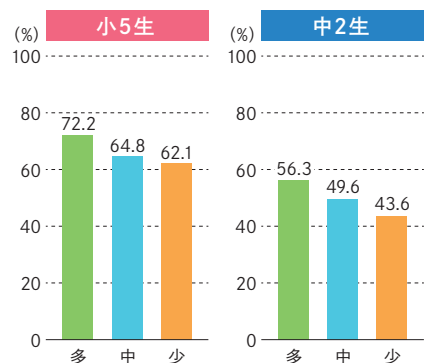
■国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる



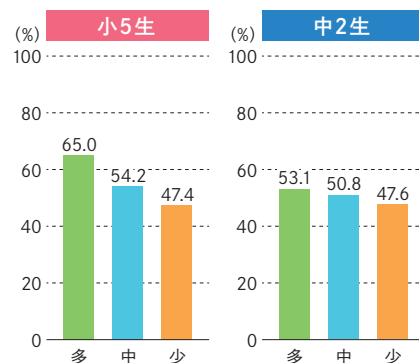
■数学の考え方や解き方を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる



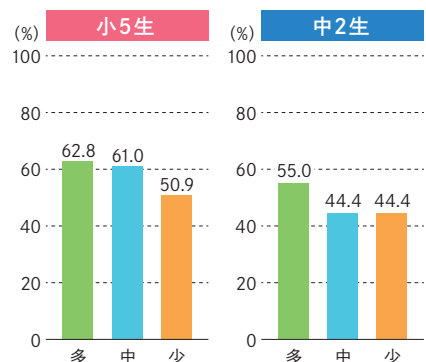
■生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ



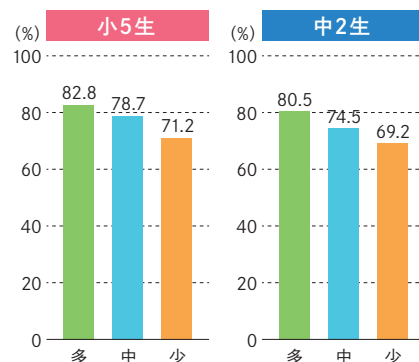
■社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ



■英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい



■自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う



注1) 数値は、ALの多い中・小の学級ごとに各設問の関心・意欲が「よくある」+「ときどきある」の合計(%)。
注2) 「多」はAL活動が多い学級の児童・生徒、「中」は中程度の学級の児童・生徒、「少」は少ない学級の児童・生徒を示す。

アクティブ・ラーニングの可能性

次に、小5生と中2生で、アクティブ・ラーニングの実施が多い学級、中程度の学級、少ない学級の3群に分け、学習意欲への影響を確かめた。図3は、各教科に関連する関心・意欲について「ある」と回答した比率を示している。アクティブ・ラーニングの実施が多い学級の子どものほど、肯定率が高い傾向が見られる。例えば、小5生で「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」の肯定率は、アクティブ・ラーニングが多い学級と少ない学級で14.4ポイントの差があった。アクティブ・ラーニングが子どもの学習意欲にプラスの影響を与えている可能性がある。

アクティブ・ラーニングの課題

ただ、図2で示した通り学級差は大きく、教員ごとの実施度合いにも差がある。学校による差もあり、どこでも同じようにアクティブ・ラーニングが行われているとは言えない。行政や学校は、指導法を開発する研修を行ったり、教員が指導を見直す機会をつくったりする必要がある。

さらに、アクティブ・ラーニングは、子どもによって効果が異なると推測される。知識・技能は、その習得に必要な学習方法や定着度が分かりやすいが、アクティブ・ラーニングは、資質・能力の身につけ方や成果の測り方が分かりにくい。そのため、幼少期から経験的学習を積み、そこから学んできた子どもにとっては有意義でも、家庭環境に恵まれずそのような活動経験が十分でない子どもには、そこから何を学べばよいのかが理解しにくいと考えられる。そうした違いも意識して、アクティブ・ラーニングに取り組むことが求められるだろう。